

戦後台湾俳句小史（一）

戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌

——生活表現の「日本化」・「近代化」——

磯 田 一 雄

1. はじめに

筆者は戦後の台湾において台湾人が行っている日本語による短歌や俳句活動について、これまで二度『成城文藝』に発表している。「台湾における日本語文藝活動の過去・現在・未来——俳句を中心にその教育文化史的意義を点描する」（『成城文藝』第197号、2006年12月）と「黄靈芝の俳句観と《台湾俳句》——台北俳句会における俳句指導（句評）を中心に——」（『成城文藝』第201号、2007年12月）がそれである。以後日本台湾学会・天理台湾学会・大阪経済法科大学アジア研究所、さらに科研の共同研究などを中心に台湾俳句をめぐる様々な課題を、時には密接な関連のある短歌をも含めて、発表してきたが、今回それらの研究を基礎として、「戦後台湾俳句小史」をまとめて見たいと考える。

戦後の台湾では「台湾歌壇」（1967年「台北短歌研究会」として発足、その後刊行された歌誌『台北歌壇』が結社名にもなる。2004年より現行名に改称）、「台北俳句会」（1970年発足）、「台湾川柳会」（1994年発足）など、日本統治期に教育を受け、戦後も日本語を積極的に使用するようになった「日本語人」が中心となって創立した日本語短詩文芸サークルが、今日まで続けて活動している。日本の短歌会や俳句会・川柳会との交流もあり、また日本の短歌誌・俳句誌・新聞などの短歌欄・俳句欄へ投稿する台湾人も少なくない。

戦後の台湾俳句は短歌より遅れて日本に紹介された。1993年5～6月、『朝日新聞』に連載中の大岡信の「折々のうた」に、『台湾万葉集』（台湾で刊行された三巻のうち、1993年1月刊行の下巻）の短歌が19首続

けて紹介され、戦後半世紀を経てなお日本の伝統的短詩が台湾で詠まれていることが、新鮮な驚きを以て迎えられた。『台湾万葉集』は集英社によって、孤蓬万里編『台湾万葉集』（1994年）、同『台湾万葉集続編』（1995年）として刊行され、やや遅れて同『孤蓬万里 半世紀・台湾万葉集補遺付』（1997年）が刊行された。孤蓬万里は台北歌壇の指導者呉建堂（1926-1998）の筆名である。大岡信は「台湾歌人たちの作品は、現在日本の歌壇で作られ、詠まれている短歌のおおよそとは、極めてかけはなれている」が「実に面白いものが多い。人生が、ここでは何と生き生きと詠われていることだろう」という¹⁾。

一方台湾俳句が「折々のうた」で紹介されたのはずっと遅れて2001年4月であり、しかも『台北俳句集』のような台湾俳壇を代表する句集からではなく、その指導者・黄靈芝（本名：黄天驥。1928-2016）の作品集から俳句2句、短歌2首が紹介されたにすぎなかった²⁾。その後黄靈芝『台湾俳句歳時記』（言叢社、2003年）が日本で刊行され、ようやく一般に台湾俳句の存在が知られるようになったが、『台湾万葉集』に比べ知名度は高くなく、また日本の俳句の季語とは共通性の乏しい特殊な「台湾季語」を用いた句ばかりなので、物珍しさはあるものの、台湾俳壇一般の紹介とは言いがたい面がある。

戦前の台湾では、渡台した日本俳人や歌人によって、短歌や俳句の結社が数多く作られた。短歌の『あらたま』（1922年11月創刊）と俳句の『ゆうかり』（1921年10月創刊）はその代表であり、ともに日本の敗戦直前まで続いている。しかしこれらの結社への台湾人の参加は多くなかった。特に俳句結社は短歌結社より台湾人の参加が少なかった。戦後台湾における日本語による俳句や短歌活動の「復活」の実態を見ても、特に戦前期から短歌結社に属していた歌人は多少いるが、俳句結社に属していた人はごくわずかである。

だが実際に俳句や短歌の創作を体験した台湾人は、そのような歌人や俳人たちよりもずっと多かった。それは一部のエリートに限られていた俳句や短歌の結社体験を学校教育が補った——特に（旧制中学校・高等女学校などの）中等学校における国語教育の成果が大きかったからではないかと思われる。それが戦後の俳句や短歌の「再生」にもつながっているのである。

植民地における教育のような文化統制の成果（浸透度）は分野ごとに

大きな差がある。台湾の場合も植民地教育のどの分野も同じように効果があったのではなく、戦後に与えた影響も教科によって大幅に異なっている。例えば修身（道徳）は効果的だったと戦後も評価されている部分があるが、歴史（国史）は国語や修身に比べると、その善悪は別としても、はるかに浸透度の低い領域だったように思われる³⁾。

その点、短歌や俳句などの日本語短詩。文芸の教育の場合は、かなり影響が残った例だったのではなかろうか。中等学校で短歌や俳句の教育を受けた人は台湾社会全体ではごく少数派であるが、表現活動であるためその影響を具体的にとらえやすい面がある。

台湾の日本語教育研究者・蔡茂豊は、日本統治期の日本語教育についてこう述べている。

戦後日本人が接した台湾人の中で日本語が達者だ、日本人に負けない程の実力をもっているという人々は、強いて言えば台湾人全人口の中で限られた「少数」派に過ぎず、日本国内に留学した人でなければ、台湾で中学（中等学校）以上の教育を受けた人々であつたはずである。（中略）結論として、中学（中等学校）以上の「国語教育」（日本語教育）は成功したろうが人口のパーセンテージからいって余りにも低かつたし、公学校の「国語教育」（日本語教育）は成功したといえるかどうか疑問があると言いたい（括弧内は引用者⁴⁾）。

俳句・短歌などの教育の場合は、その影響が戦後まで残ったという意味では（若干のためらいを感じながらではあるが）かなり「成功」したともいえるのではなかろうか。だがそれは中等教育における国語（日本語）教育の「成功」が、結果的に日本語使用の二極分解を台湾社会にもたらした、ということでもあつた。事実、戦後台湾の短歌や俳句は台湾社会から浮き上がっており、学界でも長い間「台湾文学」としては認められてこなかったのである。

もう一つ注目すべきは、戦前期台湾の中等学校では、俳句よりは短歌の方が重視されていたと思われることである。これは「敷島の道」と言われるような「日本精神」を植え付けるのには、俳句より短歌の方がふさわしいとされていたためであろう。中等学校における校友会誌に発表

された生徒の作品を見ても、俳句より短歌の方が断然多いのが目につく。後に考察するように、戦後の台湾では、まず短歌会が生まれ、その基盤の上に俳句会が成立しているのであるが、それはこのような事情を反映していると見られる。したがって戦前から戦後にかけての台湾俳句史の繋がりを見ようとしたら、俳句史と短歌史とを切り離さず、関連させてみていく必要がある。「台北俳句会」会長の黄靈芝の作品集には短歌が含まれており、台北歌壇の代表呉建堂の『孤蓬万里 半世紀』には俳句も含まれているのはその象徴ともいえる。俳壇だけ見ていたのでは戦後台湾俳句の実態はつかめないのである。このような台湾独自の事情から、本稿では、俳句だけでなく短歌の場合をも時に並行して考察することにする。以下結社レベルだけの研究では見落とされがちな局面で、戦後台湾俳句の背景となる戦前期台湾における日本語短詩文芸の実態を探っていきたい。なお、戦前期に俳句結社に属していた台湾人の俳句活動については、拙論「植民地台湾における日本語俳句の受容と課題——植民地朝鮮俳壇と比較して」『跨境 日本語文学研究』第3号（韓国・高麗大学校グローバル日本研究院、2016年6月）を参照されたい。

2. 戦前期（日本統治期）台湾における 日本語短詩文芸の普及と教育

台湾人の日本語文芸活動は、戦前・戦後を通してみれば、①萌芽期（1930年以前）、②成長期（いわゆる15年戦争期）、③伏流期（日本の敗戦より1960年代末まで——資料的に研究がもっとも困難な時期）、④復興期（台北歌壇・台北俳句会結成以後）のように時期区分されるだろう。この「成長期」の後期が「皇民化期」に当たる。

日本の植民地支配には、欧米のそれには見られないさまざまな独特の現象が生じた。被支配者の文化が支配者との交流に重要な役割を果たしたのもその一つであろう。領台初期の台湾の文人紳士は頻繁に日本の官僚と漢詩を吟唱し宴を張った。児玉源太郎や後藤新平は、台湾の伝統的な漢詩文の価値を認めなかったが、自らは漢詩集を刊行するほどの素養があった。また日台の漢詩文はかなり高度の相互通用性があった。読み音声は違っていたが、文字面だけでかなり高度の交流目的を達したという。陳培豊によれば、日本人と台湾人の間に「同文同種の水乳の交わ

り」があったのである。だがそれは間もなく衰退した。代わって台湾総督府は短歌や俳句によって日本人と台湾人の融和を導き出そうとした。日本語短詩が両者の交流の共通の道具になったというのである⁵⁾。これに関する総督府側の言説資料は示されていないが、例えば台湾総督府図書館に多数の短歌俳句の図書があったのはこれを裏付ける傍証になるであろう⁶⁾。

台湾人の俳句や短歌への接近は、島田謹二のいう「第二期」（明治38年〔1905年〕～昭和初め）に始まり、「第三期」（満州事変以後）に至って表面化したと見られている⁷⁾。しかし実際には、既に大正末期には師範学校の台湾人生徒や公学校の台湾人教師たちによって短歌や俳句が詠まれていたらしい。

台湾の師範学校では古くから俳句が教えられていたようである。1923年（大正12年）の『台湾師範学校校友会誌』は本科1年生から4年生までの各学年の台湾人生徒の詠んだ俳句を掲載している。本科1年生の作品全15句の内、一人1句ずつ以下に紹介する。教師の手が加わっているかもしれないが、最も初歩的な段階は脱した句のように思われる⁸⁾。

寒月や静かにかゝるねむの枝	李 文挙
夕立や高砂島は湯氣の中	林 清徳
白露や芋の葉末に二つ三つ	李 春生
暁を覚えぬ春の風うらゝ	李 深煙
花一輪浮きてとびつく小魚かな	曾 蓮芳
寒月や水の底にも木の葉にも	王 承達

こうした状況は台湾教育会機関誌『台湾教育』（1912年～1943年）にも反映している。『台湾教育』には「文苑」という短歌・俳句・詩・漢文などの投稿欄があり、『台湾教育』第270号（1924年12月）の「文苑」には台北第二中学校の3年生の俳句が多数掲載されている。その大部分が台湾人生徒で日本人生徒の作は少ない。こうした事実は、既に大正後期の時点で、中等学校における俳句や短歌などの指導がかなりの成果を挙げていることを示している。

『台湾教育』の「文苑」を昭和初期の段階で見ると、漢詩欄はほとんどが台湾人の投稿であり、逆に日本語文芸の欄はまだほとんどが日

本人の作で占められている。たまに台湾人の詩があるが、短歌や俳句はまだ見られない。それが1930年ごろから台湾人の詠んだ短歌や俳句が時々見られるようになり、1934年になると、台湾人による短歌や俳句の投稿が定着した感じになる。その比較的初期の例を挙げてみよう。季重ねや無季の句もあるが、同時に台湾の事件や事物を詠みこんでいる句も出てくる⁹⁾。

[和歌] 雑詠 新竹 鄭嶺秋

こもごもに熟れしと子等の告げて來し畑の蕃茄を見たくなりたり
窓外に何やらあらむ我が言に耳かさずして見とれるあの子
隣なる一年生の稽古聲国語たくみになりにけるかな
教子を叱る事もなく此頃の心ほがらにあるが嬉しき

[俳句] 雑詠 馬公 顔精義 (全30句より5句)

暮易き秋の野道やバツタ飛ぶ
一坪の小庭にも菊香ふかな
猫眠る小春日和や菊薫る
霧社事件ラヂオ圍みて噂かな
木枯にガジマルの葉の埃かな

やがて和歌（短歌）と俳句の両方に投稿するものも出てくる。これは文芸誌や新聞などの文芸欄における投稿の傾向に類似していると思われる。公学校の台湾人教師は当時の「日本語人」の代表であり、日本語短詩を最初に率先して詠み始めた台湾人には教師が多かったといえよう。

さらに台湾で発行されていた新聞の文芸欄などにも台湾人の投稿が現れてくるのである。やがて『ホトトギス』などの内地の俳誌にも投稿が見られるようになる。いずれにせよ、戦前の日本統治期に日本語短詩文芸に接し、自らも行おうとした台湾人自体が階層的に限られていた。戦後～現在の台湾歌人・俳人の経歴を見ると、圧倒的に医師と教師が多い。これら教養のある階層を中心に日本語短詩文芸活動が普及したと見られるのである。

3. 台湾人による日本語短詩文芸の受容

——表現における「日本化」と「近代化」——

前述のように、台湾総督府は、植民地化初期の段階ではまず漢詩により、次の段階では短歌や俳句により日本人と台湾人の融和を導き出そうとしたと陳培豊はいう。これに関連して日本精神ないし皇国史観と日本語短詩文芸の結びつきを重視した。特に短歌は皇民化期を中心に、後述する「奉公短歌」のように、「日本精神」の強調と結びつけて利用されることが多かった。

だが同時にその反面において近代短歌・俳句の持っていた写実主義（リアリズム）の側面が指摘されているのも事実である。短歌や俳句が盛んになった原因の一つは、それらが目の前にあるものの特性を吟詠し、その内容が当時の状況を反映したものであることだということである。例えば呉濁流は、漢詩が実感や体験の所産を経ず、常套的な字句の引き写しになっており、絶句や律詩の形式は時代に合わないといい、郭水潭は漢詩が懐旧的であり、想像で詠んでいるのに対し、短歌や俳句は古い文学形式ではあるが、今眼前にあるものを客観的に詠むので内容が時代に沿って革新されており、「古い皮袋に新酒を盛っている」にも関わらずその影響を受けていないと述べている¹⁰⁾。当時の台湾人の中に伝統的な漢詩に飽きたらぬという批判のあったことは、例えば呉濁流や郭水潭が批判する少し前に、陳逢源が林立する漢詩社を「阿片窟」に喩え、難解な貴族詩ではなく容易に作れる真摯な平民詩を要求していることにも見られる¹¹⁾。

こうしてみると、台湾人が短歌や俳句を受容するにいたった背景には、身近な生活描写の側面が伝統的な漢詩に乏しかったためだということになる。台湾人の側からすれば、これは（表現における）一種の「近代化」ともいえよう。もとよりそれは日本語による文明の摂取と密接な関連があるが、漢詩による表現の機会が奪われたためとは必ずしもいえない点に注目する必要がある。むしろ日本の近代短歌や俳句が、正岡子規の革新以後、リアリズムの契機を含むものを中心になっていたことに彼らが気付いたことが、台湾人の日本語短詩文芸受容の大きな要因であったように思われる。実際、台湾の歌壇・俳壇の中心となった『あらた

ま』や『ゆうかり』は『アララギ』・『ホトトギス』の写実主義の系統に属するとされている。

先に述べたように、台湾人による短歌や俳句の創作への参加は、島田謹二のいう「第三期」（満洲事変～1931年以後）に入る頃から活発になったと見られる。台湾人が日本語による短歌や俳句を「受容」するようになった背景に日本語教育の普及があることはいうまでもないが、それと並んで日本語短詩文芸の文学形式やその背後にある日本文化になじんできたこともその要因だろう。それは必ずしも日本語の強制や漢文の抑圧だけが原因とは思われない。確かに日常生活では日本語が強制され、公学校の漢文は廃止され、新聞の漢文欄も「自主的に」廃止となった上、漢文を教えた伝統的教育機関・書房もほとんど壊滅してしまっただが、『風月報』のような漢詩文誌は最後まで発行されていたし、『台湾教育』の文芸欄にも末期まで漢詩欄があった。台湾総督府は漢詩社に対しては意外なほど寛容だったのである。ただし、漢詩は最後まで「皇民文学」とは認められなかったという¹²⁾。

もう一つ重要と思われるのが、短歌や俳句という文学形式の長さや規約の特質である。呉建堂は「台湾の若い人たちは一般に『唐詩選』に惹かれるのが常であるが、現代人は平仄や押韻についてゆけず、短歌や俳句のほうがこなしやすい」と言っている¹³⁾。日本語短詩文芸の文学形式の持つ「取り付きやすさ」の指摘である。これは戦後の復活・再生過程においてであるが、先の呉濁流や郭水潭も指摘しているように、戦前期の台湾人にとっても、日本語さえできれば短歌や俳句のほうが漢詩よりも取り付きやすいという面があったと思われる。しかもそういう技術的な理由だけでなく、より積極的な理由が、短歌や俳句を受容した戦前期の台湾人の意識にあったのである（なお呉濁流や郭水潭は、戦後一時「台北歌壇」や「台北俳句会」に参加している）。

確かに短歌や俳句などの日本語短詩文芸が「国民精神の涵養」に有効だとする論議が高まり、台湾人の「同化・皇民化」の道具とされていたのは事実である。だがそれは統治者側の意図としては存在していたとしても、そのような事態が普及の始めから生じていたわけではない。これまで引用した作品の事例にも見られるように、まず身近な出来事や生活の表現の道具として受け入れられていったとみられるのである。

日本語短詩文芸の修得は階層と文化・教育とのかかわりをも示してい

る。日本語短詩文芸を求めるような人はごく限られており、そういう階層の台湾人は「同化―日本人化」への意識を最も強く持っていたのではないか。パトリシア・ツルミによれば、台湾で同化政策が最も成功したと見られるのは、医者、法律家、官吏、ジャーナリスト、都市の学校教師など教育ピラミッドの頂点であり、彼らの態度やライフスタイルは農村の貧しい農民に比べるとほとんど日本人と変わりなかったという¹⁴⁾。また、日本的な教育を受けた上中層階級の台湾人は、すべての領域にわたって日本的な価値を吸収していたとしている¹⁵⁾。この点について植野弘子は「さらにジェンダーの差異については、学校教育を受け公的活動を行う機会からみるならば、『日本化』の影響は男性がより大きいといえる。／しかし、『日本化』については、階層がより大きな意味を持っている。……特に、高等女学校に進学する女性たちは、他の階層の男性よりも濃厚に『日本化』の教育を受けたのである」と指摘している¹⁶⁾。

短歌・俳句などの受容は、こういうことと深いかわりがあるのではないか。というのは短歌（当時は一般に「和歌」と呼ばれた）や俳句の「たしなみ」があるということは、上流日本人の階層文化を身につけたことになるからである。このことは当時そういう教育を受けた人たちの聞き取りにも現れているが、後述の台北第三高等女学校のように和歌の教育を宮中の歌会と結び付けて、日本語の習得と日本人化の重要な媒体としていた学校があることによっても知ることができる。

4. 皇民化期の台湾中等学校における短歌教育

日本統治期の台湾における台湾人を対象とした初等教育における俳句や短歌の教育は、最終期を除き事実上無視に近かった。日本統治期の台湾の初等国語教科書への短歌や俳句の導入は内地よりずっと遅かった。内地の文部省発行の小学国語教科書の場合は、国定第四期（いわゆる「サクラ読本」）から第五学年用（1937年より使用）と第六学年用（1938年より使用）に短歌や俳句が載ることになった。国定第五期の国民学校用国語教科書では、第5学年前期用の『初等科国語 五』（1943年より使用）に、古典や近代の短歌・俳句の外、戦時短歌・戦時俳句ともいべき教材まで載せられている。

これに対し台湾では、台湾総督府編纂第三期国語教科書『公学校国語

教科書 第一種 卷十二』(第6学年後期用、1926年より使用)に、明治天皇の御製が「新高の山のふもとの民草も、しげるまさると聞くぞうれしき」など計10首が載せられたのが始まりである。これは短歌による皇民化教育と言えよう。俳句が載るのはずっと遅く、1942年から使用の6学年後期用に「元日や一系の天子富士の山」など計8句が載せられている。1944年に発行された日本統治期最後の第五期国語教科書になってようやく、一般の短歌と俳句が載るようになったのである。

つまり教科書で見る限り、日本統治期台湾の公学校尋常科(六年制)を修了しただけでは、御製以外の短歌や俳句を学ぶ機会はほとんどなかったといってよい。日本統治期の台湾の公学校は、高等科の国語教科書には短歌や俳句の教材があったけれども、尋常科の国語教科書への短歌や俳句の導入は、中等教育よりもはるかに遅れていた。もっとも台湾人の子どもも日本人(内地人)小学校に入った場合にはもちろんのこと、公学校から中等学校を受験する場合には、入学試験が日本人小学校の教育内容で行われていたから、日本人用の国語教科書を学習しておく必要があったため、高学年に配当されていた短歌や俳句を当然学んでいたろう。実際「(日本人)小学校の国語教科書を読んで俳句に興味をもった」という類の証言を時々聞いたことがある。もっとも例外的には後述の例のように、公学校でも短歌や俳句を好む教師が、時には課外でこれを指導したりしたことがあったけれども。

したがって戦前期の台湾人が短歌や俳句に接したのは、主として旧制中学校や高等女学校などの国語教育を通じてであり、特に高等女学校での短歌教育の影響は大きかったように思われる。短歌や俳句などの短詩文芸の鑑賞や創作の指導は、戦前期の日本の中等国語教育において典型的な日本文化を表すものとして重視されていたが、台湾の中等学校で特に短歌の指導を受けて身につけたと回想している人が女性に多い。これは戦前期に短歌や俳句結社への女性の参加が乏しかっただけに一層重要な意味を持つ。短歌や俳句の趣味を身につけた人は卒業後短歌会や俳句会に参加する場合もあったが、当時の歌会や句会は日本人が中心で台湾人の参加は非常に少なかった。このことは当時の歌誌や俳句誌を見れば確かめられる。

皇民化のためには鑑賞するだけでなく詠めることが必須だという主張も唱えられた。台中商業の国語教師で俳句結社『竹鷄』の主宰だった阿

川燕城は「国民性の涵養……は教科書の購読だけでは万全を期し得るものではない。／国語愛護の精神と云ふものは……文学的、表現的な創作的意欲が萌え出て始めて惹き起されるものである」といっており¹⁷⁾、渡辺義孝は短歌によってのみはじめて国語の純粋維持が出来ることを指摘、日本精神の自主自律性を高める国民皆詠を提唱している¹⁸⁾。

ところで日本語短詩文芸の指導は、国語の授業だけで行われたのではない。学校行事として「新年歌会」まで行っていたという台北第三高等女学校のような例がある。植民地期台湾の高等女学校卒業生のアンケート調査によると、台北第三高女は飛びぬけて回答率が高い。また国語の授業について、短歌や俳句を学んだことに触れている生徒の回答率と回答数が高い。この学校が特に短歌や俳句の教育に力を入れていたことがうかがえる¹⁹⁾。また教師の聞き取り調査によれば、この歌会の行事のことを詳しく覚えている一人の女教師（日本人）が次のように述べている（括弧内は引用者）²⁰⁾。

（この学校は）国語の時間が普通の女学校より多かったの。台湾の女の子を、立派な日本語を女学校（に）いる間に覚えさせるにはね、短歌をね、覚えさせるのが一番いいってことで、必須科目でしたの。短歌会というのがありましてね。……一年にいっぺん、千人くらいですかね。全校生徒を講堂に集めて、そこで、全校短歌会、……ですからね、日本語がほんとに上手でしたね。今でも上手ですよ。（中略）

短歌って言うのは言葉をえらばなきゃ、選ばなければあれが、5・7・5・7・7にまとまりませんものね。詠進歌もね、宮中の詠進もね、明治神宮ケンエイカ（献詠歌？）も毎年、全校で一斉にしたんですよ。……国語の先生も、この学校では短歌ができないとられない、なんて言って、ご自分で勉強なさいましてね。

国語の配当時間数が他の学校より多かったか、あるいは短歌が独立科目だったか、学科課程や毎週授業時数などの公的文書では確認できないが、校長の小野正雄が1936年3月14日の「第十三回卒業式」の「告辞」で次のように述べているのはいかに短歌が重視されていたかを裏書するものであろう。

諸子は卒業はしたが、まだ本当の日本人にはなっていない。私は今諸子に反省を求めるが、国語の力に於て敷島の道に於て、奉公の精神に於て、国民としての趣味に於て、欠けるところはないか²¹⁾。

ここでいう「敷島の道」とは「和歌の道」・「歌道」のことであり、それが「国語の力」「奉公の精神」「国民としての趣味」と並列されている。「本当の日本人」になるにはこうしたことをいっそう徹底させねばならないということであろう。先の女教師の証言とも一致するものである。短歌が皇民化の道具とされていたこと、その政策を皇民化期以前から強力に実践していたのが中等学校、特に高等女学校であったことを端的に示している。台北歌壇（現・台湾歌壇）に女性会員が多いのはこうした事情と関係があるかもしれない²²⁾。

高女卒業生のアンケート調査に、台北第三高女に「学校行事」として歌会があったという回答はみられない。しかし筆者の行った聴き取り調査では、この学校を1933年3月に卒業した陳宝玉（1915-2006）が「入学前に短歌や俳句のことは知らなかったが、この学校では校長が短歌を教えており、新正月には宮中の歌会を模したような短歌会を行っていた。その時の写真もある。いい歌は日本に送った。さらに旅行など学校行事があったとき、宿題にするなどして歌を作らせていた。また『扶桑』という雑誌を出していて、それに歌や文が載せられた。短歌に比べて俳句は国語の教科書にあった程度であまり習っていない。だから戦後俳句会に入った時当初は『季語』もわからなかった」と述べている。台北歌壇（現・台湾歌壇）には台北第三高女出身者が多いのが目立つ。それはこの学校の短歌教育がぬきんでていたことと並んで、この陳宝玉のような人が同窓生を多数誘って入会させた功績が大きいのではなからうか。陳宝玉は台北俳句会にも入会して優れた俳句を詠んでいる。

また「歌会」まではいかないが、短歌を生徒間で競わせていたという例もある。次の歌は授業だけでなく、学級間での俳句コンクールを教師がさせていたことを示している（以下の短歌3首は孤蓬万里編『台湾万葉集』による）。

赴任し來し師は歌の道重んじて乙女われらに短歌競はせぬ

この歌の作者は1920年生まれで、日本統治期に台湾中部の高等女学校に学んだ。卒業後当時台湾での代表的な短歌結社『あらたま』に入会している。彼女は戦後も今日まで短歌を詠み続けており、多くの知人を歌会に誘っている。また俳句会にも参加し、歌集のほか句集も出している。注目すべきは先の歌に続いて次のような歌を詠んでいることである。

師は常に自責し給ひきわれらより母国語奪ひし罪は深しと
教へ子の真心により罪意識薄ると師の喜び言ひき

これは中等学校での短歌教育の影響が強く見られる典型的な事例であると同時に、いわゆる植民地教育の犯罪性をめぐる「師」と生徒との戦後をも含めた関係を示している点でも貴重な事例である。戦後日本に戻った「師」は同窓会に招かれた時、当時の「国策」に従ったものとはいえ、生徒から母語を奪い日本語を強制してしまったことを自責せざにいらなかった。しかし日本語により自己を表現し解放するメディアを獲得した教え子たちは、それをむしろ逆に積極的な意義あるものとして受けとめてくれていた。そのことを知って「師」は救われたというのである。

このように日本語短詩文芸の習得において中等国語教育の果たした役割は大きい、中等国語教育を少なくとも1年以上まともに受けられたのは、1942年までに入学した世代だといってよい。短歌や俳句などの教養を学校で身につけられたのは1930年ころまでに生まれた世代だということになる。事実現在の台湾の日本語文芸の会の会員はほとんどが1920年代生まれである。台湾決戦文学者会議の行われた翌1943年（昭和18年）ともなると、中等学校の生徒は勤労奉仕や学徒兵に動員されたためにろくに授業を受けられなくなり、在学中にまともな学習をしていないのである。それにしても短歌や俳句の皇民化における意義の強調された時期に、初等教育でも中等教育でもまともな授業をする条件がなくなっていたのは、何とも皮肉である。

だがそういう「恵まれない」時期に中学校で学んだ人が今でも短歌や俳句を詠んでいる例がないわけではない。1942年に創立された宜蘭中学校では、落ち着いて国語の授業を受ける余裕があまりなかったのではないかと思われるのだが、同校の卒業生の中にも、現在なお台北俳句会

や日本の春燈俳句会、あるいは台湾歌壇などを中心に活動を続けている俳人や歌人がいるのである。

5. 俳句や短歌の習得過程の諸類型

蔡茂豊の指摘するように、日本統治期台湾における国語教育については、一般大衆に対してはその成果に疑問があるにしても、中等以上の教育を受けた階層の人々に対して大きな成果があったことは疑いない。今日俳句や短歌を詠む人がほぼ例外なしに中等学校ないしそれに準ずる教育機関を修了していることはその傍証ともいえよう。それは言語だけではなく、日本的な「ライフスタイル」や「態度」あるいは「価値」に深くかかわるものであり、単に日本語が上達したというだけに留まるものではない。そのことはどうしてどのように生じたか。またそれは何を意味するのか。

日本統治期の台湾人が日本語短詩文芸に導かれた過程はきわめて多様である。また戦後台湾で短歌や俳句・川柳などのサークルに集まった人たちの、日本統治期に日本語短詩文芸に導かれた過程は必ずしも単一ではないが、彼らは主として中等学校時代に、特に短歌を身に着けたと言っている。『台湾万葉集』では作品と共に、主な作者の経歴を紹介しているが、中等学校在学中に短歌や俳句を詠んだ経験に端を発しているのが一般的である。特に女性はこの傾向が強いようである。以下主として皇民化期以前の中等学校における短歌教育の実例をいくつか見てみよう。

例1) 公学校での『萬葉集』の教育

植民地期の台湾人日本語作家の一人である龍瑛宗（1910-1999）は大正後期に教育を受けた。彼の「萬葉集の思ひ出」は戦前期台湾における日本語短詩文芸愛好少年を語る貴重な戦前期史料である²³⁾。

……僕は十三、四の頃から、萬葉集を読んでいた。これは、本島人（台湾人）としては、可成り早いことではないかと思ふ。しかも、その頃、僕は、新竹州の山に近い片田舎に住んでゐた。／萬葉集を読んでゐたと書いたが、じつは、萬葉集を読まさせられたといつた

方がいいかも知れない。……この成松（といふ若い）先生は、なかなか熱心な歌人で「あらたま」の短歌雑誌にも、しばしば投稿したやうに憶えてゐる。／そして、僕たちにも短歌の手びきをしてくれたり、短歌を作らせては、添削したりしてくれた。思へば、文学の途へ進んだのはこの成松先生の影響もあると思ふ。

龍はそれから短歌が好きになって、「大いに作ったり、読んだりした」という。公学校卒業後龍は実業学校に入ったが、国文の時間に短歌を教えてくれた先生が、歌のよさは言葉では説明できない直感的なもので多分みんなにはわからないだろうが、龍君だけにはわかるだろう、といったという。彼の短歌好きが認められたのであろう。

例2) 現在の「台湾歌壇」（1967年の発足当初は「台北短歌研究会」）を創始した孤蓬万里（1926-1998、本名：呉建堂）の例は、学校における短歌取得の典型である。彼は「台高に犬養先生と出逢ひしが『台湾万葉集』生みしきっかけ」と詠んでいるように、旧制・台北高校で犬養孝の万葉集の講義の影響を深く受けていたことはよく知られている。だが彼は台高入学以前の1938年、台北第二中学校の1学年の2学期に、川見駒太郎によって短歌の手ほどきを受けており、「（川見）先生の作品は徹頭徹尾写実的であり、筆者（孤蓬万里）もその傾向をうけついで」と言っている²⁴）。彼はその作家体験の基礎の上で犬養の講義を捉えたのであろう。

例3) 日本人（内地人）中学校に学んだ台湾歌人・呉壽泉と台湾俳人・黄靈芝の場合

中等教育段階で日本語短詩文芸を身に付けたという人は多いが、呉壽泉（1920年台南生まれ）の事例は「理想的」ともいえる短歌教育の体験をした稀な例であろう。彼は戦前・戦後を通じてほとんど切れ目なく今日まで短歌活動を続け、時には俳句も詠んでいる²⁵）。

呉壽泉は1920年台南市に生まれ、台湾人のための初等学校である公学校ではなく、花園小学校という日本人（内地人）小学校に入り、5年生の時に俳句に接して興味がわき、「包丁の切れ味のよき大根かな」という俳句を作っている。母が大根を切る時の感じを詠んだという。この

句は学校の文集『青葉』に載せられたが、俳句を続けることはなかった。やがて短歌に興味を持つようになり、新聞紙上で最初期の台湾歌人・郭水潭の短歌に親しんだという。

1934年やはり内地人用の学校だった、台南第一中学校に進学、2年の時に同校に赴任してきた教師、『香蘭』（村野次郎の創刊）の同人で「短歌の道に造詣の深い」青木紀元に出逢い、青木の勧めで「香蘭」に入り、台南一中卒業まで毎月作品を発表した。『香蘭選集第一輯』（1936年）には「遠蛙」という作品14首を掲載している。台南一中の校友会誌にも中学2年から毎年短歌を発表、3年の時には研究論文「日本語の持ち味」、4年の時には「歴史より見たる短歌の変遷」を発表している。

1937年、講談社主催・文部省後援で斎藤茂吉・北原白秋らの編集による『新萬葉集』（補巻を含め全11巻。改造社）が刊行された。全国から短歌を募集して厳選の上、入選作品を載せたのである。このとき台南一中4年生だった呉壽泉はそれを『台南日報』の広告で知って応募したところ、5首出したうち、次の作品1首が入選したのである。

山の上は静けさ過ぎて深山木に落ち行く水の音きこゆなり

なぜ漢詩や俳句でなく短歌だったのかという問に対して呉壽泉は、台南一中では唐詩も習ったが、規則が複雑で一句ごとに平仄を考慮せねばならず、難しかったので作ろうとしなかった。また俳句については短い中に季語を詠みこまねばならず制限の多すぎるのが欠点だと答えている。

これに対して、戦後台湾を代表する俳人であり、台北俳句会の創立（1970年7月）から逝去まで45年余にわたってその会長であった黄靈芝（1928-2016）は、呉壽泉と同じように花園小学校を経て台南第一中学校に入学したのだが、彼の中学校体験は呉壽泉のそれとはおよそ対照的にむごいものであった。黄は次のように書いている²⁶⁾。

太平洋戦争のはじまった昭和十六年に中学に入った私は、忽ち地獄に墮ちた。台湾人のくせに日本人の中学に入ったということで二〇人近くの上級生から暴行を受けた。反抗をしたために天地が引っくり返り、その拳句、私は肋骨が一本折れ、一晚中血尿が止まらなかった。（中略）中学二年の終わる頃にととう恐怖症にか

かった私は一年休学し、年を改めて三年に上がった。……

もっともこのすぐ後に「先生にそそのかされたこともあって、もと小説家を志していた」とも書いており、事実彼は俳人や詩人であるのみならず、日本語短編作家としても戦後その資質を発揮するようになるのだから、この中学体験が彼の文学にとって全く無意味だったとはいえないかもしれない。しかし入学の時期によって学校の雰囲気がいかに違っていたかを雄弁に証言するものといえるだろう。台北俳句会会長として戦後台湾を代表する俳人となる黄靈芝は、戦後になって初めて俳句を学ぶ機会を得たのである。戦後日本に引き揚げた日本人の残していった俳句書によって俳句に興味を持つようになったというのだから、日本統治期の教育とは一見無関係に見える。しかし黄の在学した台南花園小学校では学校誌に俳句を掲載しており、同校を卒業した呉壽泉のように俳句に関心を持って句を作った生徒もいるから、黄もこの学校在学中にある程度俳句に接していた可能性はある。いずれにせよ、呉壽泉と黄靈芝の受けた中学校教育は、時期も異なるがきわめて対照的な例である。

例4) 川柳の指導者・台湾川柳会二代目会長の故・李琢玉(1925-2005。本名・李瑛璋)は公学校で川柳を教わったという。初代会長の頼天河と並んで川柳から日本語短詩文芸に導かれた例である。彼が在学した頃の公学校には国語教科書に俳句の教材もなかったのに、課外授業で川柳まで教えた教師がいたのである。日本語短詩文芸と国語教育との関係が多様だったことを示す一例である。彼はこういつている。

川柳なるものを初めて知ったのは、公学校(植民地小学校)六年生の頃と覚えている。俳句に就いて教えていた台湾人の先生が、同形式で川柳というものもあると、課外の授業をして下さった。その時の引用句は確か古川柳の「うたたねの顔へ一冊やねにふき」と銘記している。こう言うものの方もあるものかと、人格形成期の植民地の餓鬼は、強烈なインパクトを受けた。図書館へ「柳多留」を借りに行くと、係員から「お前こんなのを読んでわかるのか」と言われたが、勿論八割方は不可解、それでも解る句に出会うとぞくぞくする程嬉しかった。

兵隊にとられて配置された内務班の班長が、たまたまもと教師で川柳好きだった。「台湾（人）で川柳をやるとはおもしろい奴だ」とたいそう可愛がって貰い、且つ句作の手解きまでして貰った。お陰で軍務以外では「ほんわか」とした軍隊経験をさせて貰った²⁷⁾。

例5) 戦時下に、ほとんど教師に依らず、自主的に短歌を詠むようになった例としては、『台湾万葉集』の代表的な歌人の一人、蕭翔文(1927-1998)がいる。彼は短歌を詠むようになった経緯を次のように述べている。

彰化商業学校時代、国文の時間に、石川啄木、若山牧水の短歌を教わったのが、私と短歌の初めての出会いである。自分で歌を作るようになったのは終戦の年、沖縄の戦で陸軍特別幹部候補生の航空兵として知覧特攻基地に居た時である。第二四四戦隊に居た私達の任務は特攻機の擁護である。然も台湾人で日本の航空兵として戦っている私の心は複雑なものがあり、毎日死と隣り合せの中で感じてゐる事を文章では勿論詩で表すにはあまりにも饒舌であった。だから私の日記は歌で綴るようになり、家や友だちへの手紙も歌で埋められた²⁸⁾。

しかし孤蓬万里によれば、彼の「文学する心は幼き日に萌している」といい、公学校時代に、『少年倶楽部』や小学館の雑誌に文章や詩が入選していた。彰化商業時代には学校誌『雲雀ヶ丘』に短歌を投稿し、さらに戦後『台北歌壇』同人となる張彦勳が主宰していた文芸同人誌『ふちぐさ』を愛読しており、これが「死の影が常に漂う『特幹』になってから作歌することに結びついた」のだという。また戦後は師範大学に入るとともに、当時日文中文各半ばの体裁をとっていた『ふちぐさ』に入会したが、間もなく廃刊の憂き目にあっている²⁹⁾。

例6) 課外活動としての短歌部で学んだ例として、呉壽泉の場合は内地人系の台南第一中学校であるが、台湾人系学校としては、同じ台南の第二高等女学校の卒業生(1926年生)の事例がある。彼女は公学校時代から俳句や短歌を読んで興味を覚えていた。1938年台南第二高女入

学。放課後に趣味の時間があつたので、直ぐに短歌部に入った。短歌に興味をもっていたからである。しかし短歌は難しいと思われていたためか、短歌部に入ったのは1クラス1～2名だった。活動は週一回くらいで、先生が自作の歌を披露したり、有名人の歌を鑑賞したりしたが、細かく作歌指導をしたりする時間はなかった。もっと教えて欲しかったが先生の都合でそんなに教えてもらえなかったという。呉壽泉の場合とは対照的である。なお『キング』『少女倶楽部』のような雑誌をよく読んでいたようである。

このように僅かな例で見ても、台湾歌人・俳人の経歴は多様である。中等学校在学中に短歌や俳句の指導を受けたのに端を発している例が(特に女性に)多いが、単に授業だけでなく、学校行事や部活動(短歌部)などが含まれており複合的である。また教師ときわめてパーソナルな関係を結んでいる例もあるいっぽう、自主的に身につけた例も多い。中等学校受験者は必ず日本人用の国語教科書も学習したはずだから、そこで俳句や短歌の教材に興味を持ったという例もある。

新聞・雑誌の短歌・俳句欄なども重要なメディアであり、これは日本の同世代の体験とも通ずるものがある。例えば中学時代(1941年進学)から日本語短詩文芸が好きで書物や雑誌・新聞の短歌や俳句を読み漁って楽しんでおり、敗戦間近に米機が台湾を爆撃・機銃掃射をしながら投下した宣伝ビラに「桐一葉落ちて悲しき浪花節」という俳句を発見して感心した人がある。また公学校時代に小学館の懸賞作文に入選したり、『東台湾新報』の文芸歌壇に短歌が入選したのを契機に短歌の手ほどきを受けたりしたという人もいる。どのような新聞や雑誌が彼らに親しまれたかも重要であろう。さらにごくまれだが、俳句を習得していた、あるいは俳句に関心を持っていた家族や友人との関係が重要だった例もあるし、たった一例だが戦時下に日本内地に渡って俳句を習得した人もいたのである³⁰⁾。

6. 皇民化のための日本語短詩文芸の利用

——『新建設』の「奉公俳句」「奉公短歌」「奉公川柳」——

太平洋戦争が始まると皇民化、より端的には戦意高揚のために短歌や

俳句も動員されるにいたった。その極めつけは皇民奉公会文化部の機関誌『新建設』に掲載された、公募による「奉公短歌」「奉公俳句」である³¹⁾。さらに「奉公川柳」や、「決戦標語」にも目を向けなければならない。しかも短歌や俳句よりも、短詩形文芸としてはむしろ川柳のほうが主役だった。台湾では川柳の登場が短歌や俳句に比べて断然遅く、川柳誌も『国姓爺』（1940年1月創刊）の一誌しか出ていなかったのであるが。

(1) 「奉公川柳」「奉公短歌」「奉公俳句」の募集

『新建設』は1942年10月創刊のほぼ半年後から「奉公」の二文字を冠した川柳・短歌・俳句、さらに「決戦標語」を一般から公募して入選作を掲載するようになった。この企画は1943年5月号に登場した「奉公川柳」と「決戦標語」に始まる（1943年4月号には公募でなく選者の塚越正光による「奉公川柳」が掲載されている）。

巢立つ子も捷ち抜く御代の御奉公

(淡水街、許学禮、1943年4月号)

火の玉となつて職場に励む汗

(苑裡庄、陳朝龍、1943年4月号)

常会にもんぺの揃ふ頼母しさ

(三峡街、劉晴の子、1943年5月号)

常会は新建設の作戦部

(宜蘭市、張壁芳、1943年5月号)

5ヶ月後の1943年9月号からは「奉公短歌」・「奉公俳句」も登場するようになり、以後三者並立の状況が1945年1月号まで続く（ただし1945年1月号では「奉公」ではなく「新年」を冠しており、作者名がすべて日本名になっている）。1945年2月号には公募作品が載らず、1945年3・4月合併号に「奉公短歌」だけが載って完全に終焉となる。実質的にはどれも2年弱から1年半前後の短い寿命だった。

川柳が真っ先に募集されたのは、もともと「決戦標語」にも5・7・5の川柳調のものがかなりあったためではないかと思われる。創刊号のグラビア頁には「一億の感謝で護れ兵の家」という川柳調の標語が載っている。1943年5月号から塚越正光・選の「奉公川柳」と特定の選者名なしの「決戦標語」が毎号掲載されるようになったのだが、同号で「鋏とって敵の農夫と一騎打」の句で川柳に入選した林木根は、「決戦だ、

勝つのだ、貯蓄だ、増産だ」と同じく川柳調で標語の入選も果たしている。その後も「決戦標語」は川柳調の応募作がかなり占めている。つまり奉公川柳と決戦標語とは、一見区別しにくいほど緊密な関係があったのである。

台湾唯一の川柳誌『国姓爺』は、長い伝統のある短歌誌や俳句誌に比して遥かに遅く、1940年1月の創刊であるが、「皇民化運動と日本精神の鼓吹に少しでもお役に立ちたい」と創刊の辞にあるように、川柳ははじめから皇民化運動と密接な関連があった。因みに奉公川柳欄の選者・塚越正光は『国姓爺』の主宰であった。

「奉公短歌」や「奉公俳句」が公募されるのは「奉公川柳」より5ヶ月後だが、短歌誌も俳句誌もそれ以前から十分に「奉公」的・体制協力的になっていた。「奉公」的な短歌は一般公募される以前から『新建設』に多数掲載されている。1943年1月号には「農村新年」と題する吉植庄亮の短歌がある。「新しき年の始に祈るらく米英撃滅を豊の稔を」で始まる5首で、まさに「奉公短歌」である。またこの号の「憧れの志願兵」というグラビアには「大君の御旗の下に死してこそ人と生まれし甲斐はありけれ 田中河内介」や「ものゝふのやまと心をより合せたゞひとすぢの大綱にせよ 野村望東尼」のような歌があり、また「愛国百人一首」から「今日よりは顧みなくて大君のしこの御楯と出て立つ吾は」など防人の歌5首を並べている。1943年2月号にはわが子を出征させた父親の短歌5首、1943年3月号には記事の見出しの横に「男子我れ防人となる甲斐ぞあれ東半球の果てに死ぬれば」という歌がある。

しかし初期のころの『新建設』は、戦意高揚はむしろ「詩」に任せていた感じで、短歌は脇役であり、俳句は全く登場していない。政治的に際しての川柳・短歌・俳句の性格（利用されやすさ）の違いがこのあたりに見られるように思われる。

短歌や俳句が皇民化運動に引き込まれるのにはやはり「文化功労賞」の働きが大きかったように思われる。1943年3月号にはまず『ゆうかり』の山本孕江が「文化賞を受賞して」と題して「肇国の礎固し紀元節」「奉公の誓新たに梅馨る」など5句、次いで『あらたま』の樋詰正治が「文化功労賞を受けて」と題して、「国興る大ききみいくさの進むときたぎち心は歌はむものか」など5首を寄せている。1943年4月号に「大断食 平井二郎」「戦ふ国 小林土志朗」。そして塚越正光が「奉公

川柳」そのものの題で「素晴らしい戦果に伸びる貯金帳」などモデルの7句を出している。同時にこの号では「決戦標語」の募集広告もしている。

1943年9月号から1944年11・12月合併号まで、「奉公川柳」「奉公短歌」「奉公俳句」「決戦標語」が毎号誌面を飾ることになると同時に投稿の「常連」が現れる。傑出していたのが北投の劉昌傳で、まず決戦標語と奉公川柳に、やがて遅れて登場した奉公短歌や奉公俳句から「青年職場の歌」の歌詞にまで投稿し入選を果たす「チャンピオン」になった(標語:10回12点、川柳:10回12句、短歌:5回5首、俳句:14回15句)。「準常連」のような人がほかにもいるが、入選回数は遥かに劣り、しかも全分野に渡る人は他にいない。だが劉昌傳はじめ、こういう常連的な人で戦後台湾の短歌や俳句などに名前が見られる人はいないようである。次いで目立つのがつぎの二人である。

台北 劉昌仁 標語3回4点、川柳1回1句、俳句1回1句。
宜蘭 佐藤無我 俳句6回6句

一方戦前からの短歌や俳句の結社に参加し、戦後も活動をしていたことの明らかな人も一時期投稿している。短歌では「あらたま」の女性、俳句では『竹鷄』(台中・阿川燕城主宰)の呂鵠城である。「あらたま」の女性は2回(計2首)、呂は1回(2句)が入っただけであるが、本人の希望か、所属結社の薦めによるものかは定かでない。「奉公川柳」などで一時的に寵児になった人と、本来の歌人・俳人とで、同じ場のように詠み方が違っていったかはあとで検討しよう(8. 参照)。

このように『新建設』誌上で日本人と台湾人の「双方で投稿を競い合っていたようだ」³²⁾というのは確かである。具体的な応募状況がわかるのは「奉公俳句」の第一回(1943年5月号)だけだが、「投句150句中入選12句」と記しているところからその盛況振りが知られよう。12名のうち7名が台湾人(名)である。

だがこれは『新建設』だけに見られた現象ではない。一般の新聞の短歌や俳句の投稿欄もこの時期になると大同小異である。日本人の設立した短歌や俳句の結社に進んで参加した台湾人は少なかったが、マスコミの短歌や俳句欄などに投稿した台湾人はそれに比して(子どもまで含め

て) 遙かに多かったのである。

7. 「時局協力」と「自己表現」の間

『新建設』に掲載された「奉公短歌」や「奉公俳句」のそのすべてが戦時や緊迫して時局を思わせるような作品ばかりでは必ずしもなかったことにも注目すべきである。細かく見れば、一見してあまり「奉公的」と思えない作品を見つけることもある。これは特に俳句欄に目立つ。すなわち「秋立つや決意をかたく戦はむ 郭澤源」(1943年10月号)のような、いかにも模範生的な句だけではなく、次のような一見時局に関係の薄いような句もかなり入選している。

転業の我れに幸あれ汗を拭く	(高群薫山、1943年10月号)
新藁の匂ひ親しく仄織る	(大竹山下人、1943年11月号)
春めきて事務に疲れし窓ひらく	(劉昌傳、1944年6月号)
冷奴ありて夕餉のたのしさよ	(馬錦添、1944年8月号)
梅雨明けの焰を上げて鳳凰花	(蔡玉停、同号)
秋風に見渡すかぎり靡く甘蔗	(林金荃、1944年10月号)

こういう一見なんでもない労働や生活の一齣を詠んだ句を見ると、さわやかな感じがしないでもないが、これも戦時下ではすべて「増産」のための生活の一環と解せざるを得ない。

選者・山本孕江によれば「奉公俳句」の条件はもちろん「今日の重大事局に關聯ある句であること」だが、「それは必ずしも戦争を詠む句といふ訳ではなく、今日の緊急問題であるところの増産運動に關連ある句が却って望ましい。俳句は、しっかりと大地を踏みしめたところに最も力強いものがあるのです。……想像して作った句は、浮雲のやうなもので、すぐに消え去り印象に残るものではありません」。俳句には「体験した深い感激」が必要だといっている³³⁾。また「一億総躍起運動」に際しては、「余りに肩臂張って堅く鯨こぼってゐては却てそこに融通性を無くして終ふ結果となって終ひはしないか。要は人間としてのゆとりを各々が持つべきではなからうか」といい、「心のゆとりを求める」のに「短歌俳句も亦その一役を買ふべきであらう」といっている³⁴⁾。気色ば

んだ公式的な戦争礼賛句よりも、「増産運動」の名で日常の労働生活の一齣をゆとりを持って詠むほうがまだしも時局にふさわしいと考えたのではないか。山本の意図いかに関わらず、これは正岡子規以来の近代俳句の「写生」の精神（リアリズム）をぎりぎりの線で保つ効果があったかもしれない。

だが実際の応募句には「増産へ撃ちてし止まむ玉の汗」「増産の大煙突や春の雲」のようにスローガンのように「増産」を詠みこんだような句のほうがずっと多かった。当の山本も文化賞の受賞に際して「肇国の礎固し紀元節」「奉公の誓新たに梅薫る」のような句を作っていたし、立場上やむをえなかったのもあろうが、「天高し航空兵を志す」「台湾の護り鉄壁秋高し」のような標語的な句も詠んでいる³⁵⁾。その山本が「実生活の感動」や「心のゆとり」を説くこと自体矛盾していたといえよう。

同様なことは、数は俳句ほど多くないが「奉公短歌」にも見られる³⁶⁾。

菟麻園にま昼鋏打つ少年の額は汗に光りつつあり	曹木樹
葱まける庭の畑に青青と針なす新芽伸び並ふ見つ	由紀子
葉をわけてそと覗きみれば花野菜の蕾に青く露盛り上がる	信子
新緑に包まれし野の遠近に早苗を植うる笠おびただし	黄元性

第一首は平凡な農作業だが、航空機の潤滑油にするため学校園などで盛んにヒマの栽培が奨励された時代だからこそ「決戦生活」を詠んだことになる。その他の歌はいつどこで詠まれてもいいような生活詠の短歌である。

8. 戦時下の作品における表現と戦後の短歌・ 俳句再生とをつなぐもの

皇民化と生活詠とのアンビヴァレントな表現の問題は、一般の短歌誌や俳句詩の作品においてはどうだったか。『あらたま』誌上に掲載された一女性と頼天河の作品を垣間見てみよう³⁷⁾。二人とも戦後短歌のみならず台北俳句会に参加し、頼はさらに台湾川柳会の初代会長にもなっている。

兵士らと声もとどろに歌ひつつ涙あふれぬ仮舞台の上 一女性
紅の睡蓮の花は群がりて嵐の後に静けくも咲く

大いなる歴史つくらる大御代に満二十の年をむかへつ 頼天河
たまさかに稲葉氏をとへば只一人の碁盤びらきの客とぞなりぬ

自然詠や生活詠という本来の短歌と、時局に対する心構えを表現するという二通りの詠み方がそれぞれ見られる。俳句の場合にもこのような詠み分けが見られるが、短歌では「時局への協力姿勢」が見られる場合もなお「日常生活詠」の一部であることが多いのに対し、俳句では全くスローガンのになり、生活から切り離されてしまう。この点に短歌と俳句の表現様式の違いが端的に見られるように思われる。

当時の短歌や俳句に「奉公」的なものが多かったのは事実だが、それにもかかわらず生活の真実や自己の内面を表現する具としての意義を短歌や俳句が全く失っていたわけではないといえよう。それが戦後の短歌や俳句の復活再生への契機にもなっているのではなかろうか。

「奉公俳句」欄には、戦後台北俳句会に創立当初から逝去まで20年あまり参加した呂鶯城の次の2句が一回だけ同時入選している³⁸⁾。

決戦の監視哨塔夕焼くる
もろともに戦ひ抜かむ夏送る

これは典型的な「奉公俳句」だが、いっぽう呂が永年投稿していた『台湾新報（中部版）』に掲載された句を見ると、時局に関わりのない平和な風物詠・人事詠の句のほうが多い³⁹⁾。

逝く秋の巷に売れり杏仁茶
若き日はなやみも多し春の宵

呂は状況により「詠み分け」していたのではないか。同じ頃の『台湾新報（中部版）』の他の投稿者の作品も「奉公短歌」「奉公俳句」的な作品と日常生活詠とが相半ばしている。台北俳句会には名が見られないが、戦後俳人として一時期知られた林金莖の「秋風に見渡す限り靡く甘蔗」

という句にしても単なる写生句にすぎない。

しかし日常の生活詠や風物詠では改まった催しで上位に入選できない。1942年12月に『台湾新報（中部版）』が「芭蕉翁三百年記念台中神社献額俳句」を公募した時、呂鵠城は「菊晴の浦安こぞり戦へり」で第1位（天位）入賞を果たしている。以下「戦禍なく椰子の緑に冬晴るる」（地位）、「猩々木傷兵窓の陽に寄れり」（人位）と類似句が第6位まで続き、第7位・第8位で漸く「大雷の其俣夜となりにけり」「初夏の白き花見る山路かな」という「普通の俳句」の出番となって以下16位まで続いているのである。

概していえば、俳句は短いので象徴的な表現を用いるため、時局を反映させようと思ったら「決戦」「戦ひ抜かん」のような決まり文句に頼った「月並」な句になりやすい。短歌は叙事性があるので、詠み手の真摯な生活の実感に支えられていれば、時局を詠みこんでもなお短歌の本質を損なわない作品になりえたのではないかと思われる。むしろそれが「奉公」の目的で利用されたこと自体は疑いない。しかしそれを軽々に批判することは出来ないだろう。ここまで追い込まれた台湾人の立場からすれば、彼らなりのぎりぎりの主体性がそこにあったことを認めざるを得ない。戦後日本語短詩文芸が再生するか否かの分かれ目がそこにあったのではなからうか。

「奉公短歌」や「奉公俳句」などは台湾人の間に短歌や俳句を広めたのではないかと思われるが、このような戦意高揚に利用された文芸が果たして戦後の台湾日本語短詩文芸活動の母胎となりえたかは、慎重に検討する必要がある。時局迎合の見え透いたような薄っぺらな作品もあれば、時局表現と密接にくっついた形で、個人の内面や生活を表現するという機能を同時に果たしていたような作品もあるからである。これには「あらたま」の女性や看護助手の歌のように、両者が重なり合って表現されている場合もあれば、頼天河や呂鵠城のように、場合によって「使い分け」をしていたような例もある。中にはほとんど皇民化的・奉公的な作品を詠まなかった人もいるが、大多数の作者はこのどちらかではなかったらうか。そこに戦後の台湾人にとって生活表現や自己表現の手ごろで重要な媒体となる条件が辛うじて残されていたのではないか。それは「皇民化」が基調であって表現の「近代化」などとはとても呼べないという見解もあろう。そもそも台湾には日本化と一体化した「近代

化」しかありえなかったのである。問題はそれを台湾人がどのように自分の表現の武器としえたかに関わると思われる。

戦時下の生活が当時の短歌や俳句の題材になること自体は当然のことだろう。彼らに反戦的な態度を期待するのはないものねだりに過ぎよう。問題は詠み振りが地についているかどうか、本心から詠んでいるかどうかではないか。中には時局におもねらず、地に足をつけて、心情を偽らずに詠み続けた代表的な俳人・歌人そして詩人でもあるような人も少数ながら存在する。こういう人がひそかに持ち続けた、戦時下にも犯されなかった「詩心」こそまさに戦前期と戦後期をつなぐ「ミッシング・リンク」だといえるのではなからうか。

それに対して『新建設』でおよそ「奉公」あるいは「決戦」とつく作品の応募でチャンピオンになった劉昌傳のような作家が戦後復活した様子は管見にして見られない。彼の作品は「奉公短歌」なら短歌の形を借りて時局に便乗した体裁のよいお説教あるいはスローガンの観があった。例えば「勝つための国の糧なり播く粉のその一粒もおろそかにせじ」というような作品がそれである⁴⁰⁾。彼のみならず『新建設』の常連だったような作家で戦後名が知られている人はいないようである。『台湾教育』文芸欄の常連だった呉阿泉も「奉公俳句」に「勝ち抜かむ練成始む雲の峰」といかにもとってつけたような句を出し、また「奉公短歌」に「死してなほアツツ島守る将兵の心をもちて事に当たらむ」というような時局迎合的な作品を出していたが⁴¹⁾、戦後の活動については不明である。浮わつた読み振りをせず、あくまでも自分の生きる手立てとしての生活詠の姿勢を貫いた人が、戦後もその表現を維持しえたのではないだろうか。

9. まとめ

——日本語の受容（日本化）と詩的表現の近代化

ここでそもそも短歌や俳句以前に、まず日本化ないし日本語の受容そのものの持つ意義を振り返ってみることが必要だろう。

日本の採った日本語教育を基盤とする「同化」政策は、思想感情の同一化を図るもので、権利・義務関係の平等化ではなく差別化であったが、そこには同時に「文明化」という要素もあったということを陳培豊は主

張する。そしてこの点を見ようとしないうちの先行研究を彼は批判している。陳培豊は、植民地化の「暗」の部分のみを焦点化することによって、台湾人の立場を結局とらえきれないとして、次のように言う。

（中国白話文、台湾語ローマ字化運動、台湾白話字など）一連の言語改革が行われたものの、国語（日本語）教育に対する台湾人の要求は止むことはなかった。その背後には、近代的な生活に対応できる自己の言語の創出が成功するまで、国語（日本語）教育を拒絶することはできない、それは僅かな近代化への道を自らとぞすことを意味するという認識が存在していた（括弧内は引用者）⁴²⁾。

この「文明化」と「日本化」に相当する対比は呉文星も行っている。台湾の植民地化に伴って、例えば断髪や服装の変化が導入されたが、「これは西洋化の時流に適應する現代的な改革であり、必ずしも日本への同化とは言えない。……現代化に対して自己同一化したにすぎない」と呉文星はいう⁴³⁾。後藤新平らが教育の規模の縮小・修学の抑制の方針を採ったのは、台湾人の「受容による抵抗」、「（文明化の）普及による崩壊」という逆説的な事態の発生を回避するための措置だったということになる。「日清戦争後、（日本の）統治者は国語を経路として歴史主義のナショナリズム（日本民族主義）を台湾に根づかせようと試みたが、その国語を媒介として相対する近代主義ナショナリズムを台湾住民の間に触発させる結果となった」というのである⁴⁴⁾。文学の領域での類似の見解としては、藤井省三がアンダーソンに基づいて、皇民文学を核として台湾ナショナリズムが形成されたと主張している⁴⁵⁾。近代文明の付与（統治者にゆだねる受動的な実施）と希求（被統治者による主動的な受容）との均衡をいかに維持するか、ということが中核的な課題として存在していたということである。だが問題は皇民化時代にもそれが通用したかということであろう。

「同化は日本化の理想であるが、皇民化は日本化の現実である」とレオ・チンは言う⁴⁶⁾。「皇民化」において「日本人である」ということは、もはや内面的な信念や信仰の問題ではなく、例えば神社の前では必ず拍手を打つとか、「天皇陛下万歳」と叫ぶとかいった、一連の身体的な活動自体のことである⁴⁷⁾。それ以外のあり方は一切許されないのである。

そのような状況下で「文明化」と「日本化」を「渡し別ける」ようなことが果たして可能だったろうか、という問題がある。

皇民化期には短歌や俳句もその道具とされ、特に太平洋戦争勃発以後となると詩歌も日本精神＝皇国史観一色に彩られたような感じになる。これは特に中等教育において顕著に見られるが、初等教育においても台湾総督府は『皇国の道』という機関誌を通じて時局協力を基調とした短歌を募集した。一般社会人に対しては皇民奉公会文化部機関誌『新建設』における「奉公川柳」「奉公短歌」「奉公俳句」の公募を行っている。皮肉なことに、こうした動きが台湾人の間に短歌や俳句をいっそう広めることにもなったのではなかろうか。

しかしその陰で近代短歌俳句におけるリアリズムの流れに即したような、必ずしも時局迎合的でない日常生活詠もまた細々ながら続いていたことを見逃してはならない。戦時下といえども「生活」の真実はあったのであり、それを「増産」などになぞらえて詠みこむ、ぎりぎり一杯の自己表現があったのである。戦後も日本語短詩文芸が見放されずに維持されてきたのはそういう詠み方が継承されたためではなかったろうか。既に「生活表現の武器」となりえていたからこそ、戦後の日本語短詩文芸の「復活」が促されたのではないかと思われる。「皇民化」の道具とされたものがそのまま甦ったとは見られないのではないか、というのが筆者の基本的な仮説である。

【あとがき】引用した作品は、故人の場合を除き原則として作者名を省略した。また敬称はすべて省略したことをお断りしておく。

注

- 1) 大岡信「序文」『台湾万葉集』集英社、1994年。なお台湾版『台湾万葉集』は上巻（1981年）、中巻（1988年）、下巻（1993年）があるが、集英社版とは刊行順や収録内容にずれがある。
- 2) 大岡信「折々のうた」『朝日新聞』2001年4月18日及び19日付。俳句としては『黄靈芝作品集 15』（2000年12月、私家版）より「馬酔木野や句帳弓手に行くお侠」「殺鼠週 候鳥愛護週の次」の2句が紹介されている。
- 3) 周婉窈「失落的道德之世界——日本殖民統治期台湾公学校修身教育之研究」『台湾史研究』第8巻第2期、台北・中央研究院台湾史研究所、2002

- 年、34-35頁（原文、中文）。
- 4) 蔡茂豐『台湾における日本語教育の史的研究』、東呉大学日本文化研究所、1989年、18頁。
 - 5) 陳培豐「日治時期的漢詩文、国民性與皇民文学——在流通與切斷過程中走向純正婦——」、『跨領域的台湾文学研究學術研討會論文集』、国家台湾文学館、台南、2006年（原文、中文）。
 - 6) 台湾中央研究院には短歌や俳句に関する台湾総督府の蔵書が、短歌関係785冊、俳句関係408冊保存されている。
 - 7) 鳥田謹二『華麗島文学志——日本詩人の台湾体験』（再刊）明治書院、1995年、466頁。
 - 8) 台湾師範学校『台湾師範学校校友会誌』行啓記念号、大正12年（1923年）6月。
 - 9) 『台湾教育』第342号、1931年1月「文苑」欄。
 - 10) 吳濁流「讀貴誌感對漢詩之管見」『台湾新文学』1-8、1936年9月及び、郭水潭「台湾日人文学概観」『新文学雑誌叢刊』。周華斌『從敷島到華麗島的受容與變異——探求日拋時期日本到台灣的短歌與俳句文学——』国立成功大学台湾文学研究所論文、2007年6月、43頁より再引用（原文、中文）。
 - 11) 陳逢源「對於台湾旧詩壇——投下一巨大的炸彈」（上・下）、『南音』第1卷2号、同第1卷3号、1932年、『日本統治期台湾文学文藝評論集』第1卷、緑陰書房、2001年、138-144頁。
 - 12) 前掲陳培豐「日治時期的漢詩文、国民性與皇民文学——在流通與切斷過程中走向純正婦——」。
 - 13) 孤蓬萬里編『台湾萬葉集』、集英社、1994年、218頁。同じ意見を他にも時折聞くことがある。
 - 14) Tsurumi, E. Patricia, *Japanese Colonial Education in Taiwan 1895-1945*, Harvard University Press, 1977, p.177
 - 15) Tsurumi, E. Patricia, *Colonial Education in Korea and Taiwan*, Meyers, R. H. & Peattie, M. R. ed., *The Japanese Colonial Empire, 1895-1945.*, Princeton University Press, 1984, p.309
 - 16) 植野弘子「植民地台湾における高等女学校生の《日本》——生活文化の変容に関する試論」、五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」——植民地経験の連続・変貌・利用——』風響社、2006年、122頁。
 - 17) 阿川燕城「台湾俳句の文化性」『俳句研究』第11巻4号、1944年4月、32頁。
 - 18) 「台湾決戦文学会議」『文藝台湾』終刊号、1944年1月、33頁。
 - 19) 山本禮子・新井淑子代表・高等女学校研究会『高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料 No.5（台湾の高等女学校の分）——戦前の女子中等教育の研究』1955年、及び『植民地台湾における高等女学校出身の女

教師の実態と意識——アンケートとインタビュー調査資料——平成7年度～9年度科学研究費補助金（基盤研究C（2））研究成果報告書（研究代表・新井淑子、1998年）にはこの台北第三高女のことが特に詳しく出ている。

- 20) 前掲『植民地台湾における高等女学校出身の女教師の実態と意識』447-448頁。
- 21) 台北第三高等女学校『第十三回卒業記念帖』1936（昭和11）年3月。
- 22) 孤蓬万里編『台湾萬葉集』集英社（1994年）・『台湾萬葉集続編』（1995年）などに歌だけでなく経歴も紹介されている台湾歌壇の会員は104名だが、内訳は男性45名、女性59名と、6割弱が女性である。
- 23) 龍瑛宗「万葉集の思ひ出」『台湾文藝』創刊号、1944年。
- 24) 孤蓬万里『台湾萬葉集』物語、岩波書店、1994年。なお台北第二中学校校友会誌『青芝 紀元二千六百年記念号』1940年には、孤蓬万里の評のとおり、「新高紀行」と題する川見駒太郎の歌が51首載っている。
- 25) 筆者の聞き取り及び台南一中の同窓会誌（刊行年月不明）に掲載された自伝による。
- 26) 黄靈芝「あとがき 戦後の台湾俳句」、『台北俳句集 25』私家版、1998年、144-145頁。
- 27) 李瑛璋「川柳会発足の話に飛びつく」、『台湾川柳会二周年記念誌』1996年8月。今川乱魚編『李琢玉川柳句集 酔牛』、新葉館出版、2006年、より再引用。
- 28) 「あとがき」蕭翔文『三つの祖国』、私家版、2006年。
- 29) 孤蓬万里編『台湾萬葉集』、集英社、1994年、195-196頁。
- 30) 磯田一雄「皇民化期におけるある台湾人の俳句習得過程の実際——戦時下台湾少年俳人の形成過程」、天理台湾学会第23回研究大会発表要旨、2013年6月29日。
- 31) 以下引用は、皇民奉公会中央本部『新建設』（復刻版）、総和社、2005年による。
- 32) 『『新建設』別冊解題・総目次・索引』11頁。
- 33) 山本孕江「選後に」『新建設』1943年10月号、7頁。
- 34) 山本孕江「総蹶起運動と俳人」『台湾文藝』第1巻2号、1944年6月、12頁。
- 35) 「奉公俳句」『新建設』1944年11・12月合併号、31頁。
- 36) 曹木樹 = 『新建設』1943年12月号23頁、由紀子 = 同1944年1月号42頁、信子 = 同1944年3月号17頁、黄元性 = 同1944年8月号11頁（各「奉公短歌」欄）。
- 37) H.Y.の第一首は『あらたま』1941年10月号、第二首同誌同年12月号。頼天河の第一首は同誌1942年6月号、第二首は同誌同年7月号にそれぞれ

れ掲載されている。

- 38) 『新建設』1943年10月号「奉公俳句」欄。
- 39) 『台湾新報（中部版）』1944年11月6日付及び1945年4月12日付。
- 40) 『新建設』1944年1月号「奉公短歌」欄。
- 41) とともに『新建設』1943年9月号の「奉公俳句」欄及び「奉公短歌」欄に掲載。
- 42) 陳培豊『「同化」の同床異夢』三元社、2001年、301-302頁。括弧内は引用者が補う。
- 43) 呉文星『日抛時期台湾社会領導階層之研究』、1992年、281-283頁。この「現代化」への「自己同一化」は陳のいう「文明への同化」に相当する。この場合の「自己同一化」は「台湾人にとって受動的な意味しか持たない」といわれる恐れはないであろう。
- 44) 陳培豊『「同化」の同床異夢』137頁及び307-308頁。括弧内は引用者が補う。
- 45) 藤井省三『台湾文学この百年』1998年、64頁。
- 46) Leo T. S. Ching, *Becoming "Japanese"—Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation*, University of California Press, 2001, p.126.
- 47) Leo T. S. Ching, ditto, pp.89-90.